

生きられる建築  
 相互作用による意味の変容  
 LIVING ARCHITECTURE  
 Transformation of meaning by interaction

12023003 伊東由莉  
 主査 宮 晶子 准教授  
 副査 片山 伸也 准教授 江尻 憲泰 教授

建築は変化しないのであろうか。人間の安らぎの場所として、働く場所として、都市の象徴として、建築は揺るぎない物質性を持ちそこに建っている。無機質なものであり、形を変えることはない。しかし、人間の社会においては、他者の動きや声のトーン、表情などの機微を読み取り、その人に対する解釈が絶えず変化することがあるだろう。それと同様に、建築の人間に与える意味が変化することや、人間の建築への解釈が絶えず変化することによる、建築の変容は起こり得るのではないだろうか。

本研究は、意味の生成過程に重きをおいているシンボリック相互作用論という社会学をもとに、建築の変容の可能性について研究を行う。人間の機微を感じるように、建築に対しても機微を感じることができる空間というのはどのようなものであるのかについて、既存の建築を分析することより考察を行う。絶対的物質性と変容性をあわせもつ建築はまさに「生きられる建築」と呼べるのである。

**Keywords:** Symbolic Interactionism, meaning, Transformation, Interaction, Self-plurality, City  
 シンボリック相互作用論, 意味, 変容, 相互作用, 自己の複数性, 都市

## 1. 序論

### 1-1. 研究背景

全ての事物には多数の意味が存在している。同じものを見ていても別の印象を持つことがある。見えている事物の意味は自己にとっての意味であり、自分がその事物に対して抱く意味は、自分で見聞きしたことや周りの人からの影響など、今までの経験から決定されている。その認識が他人と共有できることもあれば、自分だけのものとなることもある。同じものを見ているのに、違うことを考えていることもある。自分がもつ意味に対して共感されることもあるだろう。また、自分の中でさえも様々な意見が出てくる時もある。そのような人々もつ事物に対する解釈の差があることや、自己の中での様々な解釈でのものの見方に興味をもった。全ての事物に意味があるように、建築や建築がつくり出す事物についても意味の複数性があるのではないかと考えた。事物の持つ意味の複数性を認識することや、それらを共有することで新たに事物に対して意味が変容していくこと、そこに豊かさや生まれることに現代の多様化の社会の中での大きな可能性があるのではないかと考えた。

### 1-2. 研究目的

事物に対する自己や他者との間での意味の違いが生まれることや、事物にその意味が付与される過程を、社会学者のブルーマーが提唱したシンボリック相互作用論を分析することにより、理解を深める。その際に自己内の相互作用における、自己の複数性の存在や関わり方について考察するとともに、個人間の相互作用による社会的意味の生成過程についても考察を行う。そして、建築や空間にもつ意味の変容はどのような構成で起きやすくなるかという分析や、建築に対してシンボルを感じるのどのような建築であるのかということを経験の建築を細かく分析することで明らかにする。

建築と自己が相互作用をし、建築や空間、また空間を構成している建築の要素に対して意識すること、意味を考えること、意味の変容を感じることも、人間同士の仕草や動作、話し方などからその人の機微を感じることと同様に、建築に対しても機微や意味の変容を感じ、人と建築が相互に存在しているということを感じることで「生きられる建築」を設計することを目的とする。

### 1-3. 研究構成

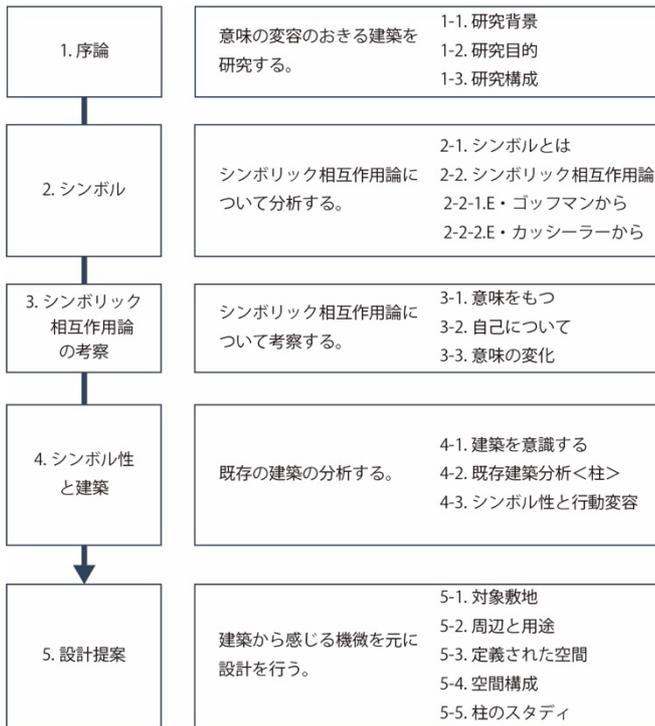


図1 研究構成

## 2. シンボル

### 2-1. シンボルとは

シンボル (symbol) とは象徴、表象、記号とも言われる。ある物や事を別の物や事によって表すことをシンボルという。例としては東京タワーを見て東京という都市のシンボルと捉えるなどである。だが、シンボルは多様な意味を含んでいる。本研究で扱うシンボルを明確にするためにも、社会的側面と哲学的側面からシンボルを分析する。

シンボルの社会的側面とは、そのシンボルが獲得している意味が社会全体やその組織全体の共通認識となっている場合である。また、事物からシンボルを想像できるように、シンボルから事物を想像できるような、事物とシンボルが強い関係で結びついているものを指す。それに対し、哲学的側面とはドイツの哲学者 E・カッシーラーによる「人間は象徴を操る動物である」と述べたように、事物がもつシンボルが人によって、時によって、場所によって変化することである。本研究では、後者の哲学的側面のシンボルについて主に扱う。

### 2-2. シンボリック相互作用論

1960年代はじめにアメリカの社会学者 H・ブルーマーが提唱した、シンボリック相互作用論という論がある。それは社会における人々のシンボリックな相互作用を研究の対象としている。はじめはアメリカの社会学者ジョージ・ハーバード・ミードに遡り、彼を師とするブルーマーがミードの思想を解釈し、シンボリック相互作用論の体系化が図られている。

H・ブルーマー著の『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』より、シンボリック相互作用論の基本的な性質は次のように述べられている。

1. 人間は、ものが自分に対して持つ意味のによって、そのものごとに対して行為するというもの。
  2. ものごとの意味は個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生するというものである。
  3. このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりするというもの。
- ※ものごとは、人間が自分の世界の中で気にとめるあらゆるもの。

図2 シンボリック作用論の基本的性質

ミードの思想として同著に、「人間は自己をもった生命体である。」  
「人間は自分自身にとっての対象となる、自分自身についての認識をもち、自分自身とコミュニケーションし、自分自身に向けて行為することができる。」と書かれている。例えば空腹を知覚することができれば、それを表現するだけではなく、その空腹という事に対して行為をすることができるということである。また、ミードの社会学的相互作用の捉え方として、「人間の相互作用において、お互いの行為が解釈され定義されているという過程を中心に添えている」と述べられている。ここで言う解釈 (interpretation) とは他者の行為や言及の意味を確定することであり、定義 (definition) とは自分がどう行為しようとしているのかに関する指示を他者に対して伝達すること、としている。この解釈と定義はくり返し絶えず行われると述べられている。

以上からシンボリック相互作用論とは、自分自身の中にある自己との相互作用、個人間の他者との相互作用、これらを得てシンボルが意味をもつと言う、意味の生成過程に重きをおいた論であると言える。



図3 シンボリック相互作用論

シンボリック相互作用論に位置付けられる立場をもつ、社会学が多数存在する。アメリカの社会学者 E・ゴッフマンや、ドイツの哲学者 E・カッシーラーの視点からシンボリック相互作用論について考察する。

## 2-2-1. E・ゴッフマンから

片桐雅隆編『意味と日常世界 シンボリックインタラクショニズムの社会学』によると、ゴッフマンの社会学の主題として「相互作用の秩序」あるいは「経験の構造（組織化）」があげられている。そして相互作用や経験を「自然のままに生きた個人の経験」として捉えることが重要であるとしている。ゴッフマンは「行為を行う個人は身体やことばの動きを通してたえず変容にさらされている」と述べており、「一種の独特のリアリティを構成する相互作用の小さな世界を『（一般）社会—社会的相互作用—個人（パーソナリティ）』という異なる三つの次元のつながりと乖離においてとらえようとした」ということから過程に構造があるのではないかと考えていた。

また、「出来事や行為や談話は、ある意味の構造から別の意味の構造への過程としてとらえられる」という記述から、現実世界における意味の構成の存在について説明している。人と人の相互作用においては、「個人の表現は、それを見る他者の側において印象として受けとれられ、公的な意味を与えられる。個人が自らの表現に勝手な意味づけをしても、公的にはそれが通用するというわけではない。このような印象としての表現は、個人の自己の呈示の一部としてまとめられるのである。呈示される自己は共有される状況の定義に従うかぎり、公認されるだろう」との記述から、自己の共有が個人間で行われることによる意味の決定について述べていると言える。

そして「逸脱行為は、個人の性格的な問題について説明されるよりも、まず第一に状況に対する反応の差異として解釈されるべき」より逸脱としてのシンボルは固定したものではなく変容するべきであり、状況に対して人々がどのような反応を示すのかが個人の解釈によって変わるということを理解すべきだとしている。

「状況ごとに公的イメージとしての自己を変える多元的役割演技者としての個人は、特定状況での瞬間ごとに、距離をとる表現の可能性を開拓し、たえず自己を変容させている。個人は社会とのつながりのなかで『自己の同時的多元性』に従事している」と述べていることから、自分自身の中で自己が同時に複数存在することについても説明している。

以上のことから、ゴッフマンは社会学を個人の視点からみていることが分かる。また、自己の意味づけが社会的意味をもつには個人間で共有されることが必要となると主張している。また、自己の複数性は経験によってもたらされるということから、建築に置き換えると建築や空間を何度か体験することが、大切であることが分かる。

## 2-2-2. E・カッシーラーから

E・カッシーラー著『シンボル形式の哲学3 認識の現象学』によると意味は、「単純に『ただ存在している』のではなく、それらが互いのために存在しあっている、つまりそれらが相互に指示しあい、特定の意味で代理しあうことができるということによって本質的に規定されているのである。」と記述されている。つまり、意味が独立してあるのではなく、相互作用によって意味の存在が生まれているということである。

また、カッシーラーは、現実世界はさまざまな経験的内容と結びついて特定の意味をもった全体を構成するということを描べている。音喜多信博氏『E・カッシーラー『シンボル形式の哲学』第3巻「認

識の現象学」における「シンボル」概念—その現代的意義についての予備的考察—より、ネッカーの立方体を一例に説明している。ネッカーの立方体とは、上から見下ろすような立方体の状況と、下から見上げたような立方体の状況の二通りの見方ができる立方体である。ひとつの見方をしてい

るときには、簡単に見方を切り替えることはできない。見方は固定されてしまうが、その立方体にもつ意味を変化させることで、ものを見方を変容させることができる。人は立方体を上から見るとどうなるのか、下から見るとどうなるのかという経験をもっているために、見えているものの把握ができるのである。

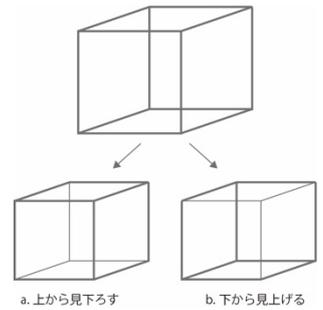


図4 ネッカーの立方体

その立方体にもつ意味を変化させることで、ものを見方を変容させることができる。人は立方体を上から見るとどうなるのか、下から見るとどうなるのかという経験をもっているために、見えているものの把握ができるのである。

以上から相互作用におけるシンボルの在り方に対して、ものが持つ意味は相互作用によって存在していることや、その意味の変容は経験的内容から起きるといことが主張されている。また固定されたものへの見方は、自己とものとの相互関係により、どのような関係性を持つのか意識することが大切であることが分かる。

## 3. シンボリック相互作用論についての考察

### 3-1. 意味をもつきっかけ

シンボリック相互作用論における最初の段階である、自己の中での相互作用とは、その事物に対して何を思うのかという、事物に対する自分の認識の理解、解釈の可能性について自己の中で考えることである。そして意味の生成はその事物に関しての解釈と捉えられ、自己や個人間などの相互作用においてそれらの解釈は豊かになっていく。事物に対してもつ今の意味定義と、豊かな解釈の中での意味の変容が起き意味の再定義が行われる。その定義と再定義の間には別のものである差異が必要になる。それは大幅に違うものでもあり、言葉では表現しがたいような微細な差異でもある。また、再定義を認識するのはいつであるのかについて考える。再定義を行うのは定義と再定義の間の差異を認識する時点である。空間における例を出して考えてみる。廊下という細長い空間があり、人々はその空間に対して様々な解釈を行う。しかし認識することの原点である、はじめの定義というのは<廊下>であり、それは共通認識である。<廊下>と解釈されたのちに、その空間が他にどう定義できるのかを考える。しかし、定義しにくい空間に対しては軸となる定義がないために、自由に解釈を行うことが困難である。つまり、様々な解釈を持つためには、はじめの定義という存在が重要になると仮定できる。



図5 定義と再定義

また、日常生活において、事物に意味をもつというきっかけとなるのは帰属意識も大切なのではないかと考える。例えば「ただの街」という意識から「わたしの街」という、認識に変化することが、その街に対する意識をし、注視して街をみるようになることと同様に、日常生活における意味をもつきっかけも帰属意識によるものがあるのではないかと仮定される。

### 3-2. 自己について

シンボリック相互作用論における自己の相互作用において、自己の複数性についても語られている。家で自分、学校で自分、職場で自分という場面における様々な側面をもつ自己が存在するように、場面が同じでも複数の自己が存在する。ゴッフマンが述べていたように、「自己の同時多元性」があり、自己の中での他者の立場にたつ自分と自分自身の相互作用による解釈の幅の豊かさにつながる。それが意味の変容を起こすのである。

### 3-3. 意味の変化

シンボリック相互作用論における個人間での相互作用において、意味が生成されるということについて考える。自己による解釈によって定義された事物に対する意味を、他者と何かしらの形で共有することにより個人間の相互作用が起きる。個人間において事物に対して同じ意味を共有するという事は、その意味は固定されている、社会的意味(=社会的シンボル)をもったものとなる。それとは反対に、ひとつの事物に対して違う意味をもつものは意味に解釈の余地があり、シンボルとして強固な固定のない揺らぎのあるものと言え。空間に置き換えて例を出してみる。あるひとつの空間に対して、Aさんは「待ち合わせ場所、休憩場所」としての空間の解釈、Bさんは「待ち合わせ場所、本を読む場所」としての空間の解釈を行なったとする。これを図で表すと以下のようになる。その中で「待ち合わせ場所」という空間に対する解釈が共有できるものであり、それが社会的意味となりえる。それに対し、AさんBさんが固有にもつ空間への解釈「休憩場所」「本を読む場所」が自己内で相互作用される時に生じた解釈なのである。

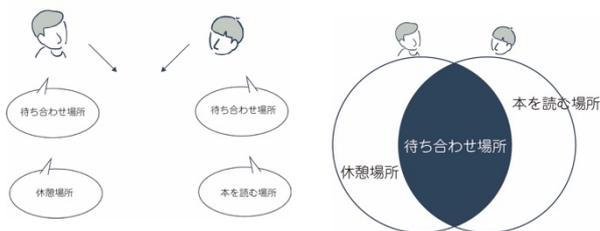


図6 個人間の相互作用

共有される意味というのは前述の通り、社会的意味であることが多いように思われるが、意味は変容するということが分かったことから、自己の中の意味が社会的意味へと変容した例をあげる。コロナ禍となり飲食店が時短営業となった背景から路上飲みが増えた。それが顕著に現れたのが下北沢の駅前広場である。駅前広場ではイベント事なども行われるが夜になると人々が集う場所のようになっている。コロナ禍前からそれは見かけられたが、それほどまで多い印象はなかった。その中で、自己内の解釈で駅前広場の空間に対する

意味に、待ち合わせや集う場所という意味意外にも「飲酒場所」を含んでいた人がいたのであろう。その個人の間で「飲酒場所」としての意味を共有したことにより、「飲酒場所」という意味が社会的意味、強い意味を持つようになったという意味生成の過程を推測できる。これは、路上で自然発生的におきた空間に対する社会的意味の変容である。そこには社会背景と下北沢の人々の自己の意味の解釈の豊かさ、下北沢という地域が持つ特徴が影響しているだと考えられる。

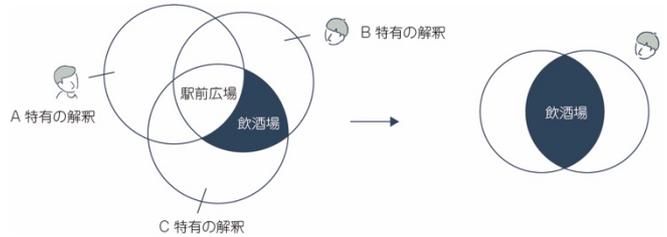


図7 社会的意味の生成

## 4. シンボル性と建築

### 4-1. 建築を意識する

青山にある横文彦氏設計のスパイラルの2階、階段の踊り場のような空間には道側に開かれた大きな窓とその側には椅子がおかれている。私はその空間にとっても惹かれる。私はそこに行くと、窓から見える歩く人々はどこに行くのだろうと考えたり、同じ空間にいる知らない人を気にしては、あの人は何を考えて外を眺めているのだろうかなどと考えたりしている。それと同様に窓のそばの柱に対しては、よっかかりたいと思ったり、通ってきた階段に対しては直線で作られているためもっと上へ上へと行きたくなるような気持ちになったりする。ここでは日常で他者を意識してしまうように、柱や階段などをとても意識的に感じているのだと思った。

注1)



図8 スパイラル

それに対して、日本女子大学にある妹島和世氏設計の百二十年館はピロティがあり柱がその空間をつくっている。柱の間には椅子やテーブルが置かれている。しかし、スパイラルで感じたような柱に対する意識はおきなかった。

このことから、建築を構成する要素が人間に対して何か意識を持たせるような場合とそうではない場合があることが分かった。その

何か意識をもつということ、建築の要素に対して『シンボル性をもつ』要素だと言うことにする。例えば私が体験した、スパイラルの空間での柱はよっかかりたいと思わせるような『シンボル性をもつ』柱であると言い換えることができる。

#### 4-2. 既存建築分析<柱>

私が建築に対して感じる『シンボル性』というのは何によってもつのかを分析する。スパイラルと百二十年館を比較した際に差異を感じた、<柱>に注目して本研究では分析を行う。

スパイラル(横文彦)、日本女子大学百二十年館(妹島和世)、KAIT工房(石上純也)、せんだいメディアテーク(伊東豊雄)、上州富岡駅(TNA)、高架柱(日比谷 OKUROJIを参考とする)の6つの建築を見ていく。スパイラルと百二十年館においては、前述した体験からシンボル性をもつものもたない例として分析対象とし、KAIT 工房は柱によって構成されている建築であるということ、せんだいメディアテークはスラブとチューブと呼ばれる柱の構成によ

ってできている建築であることから分析対象とした。上州富岡駅と高架柱については柱の形状が細長い、または太いなどの特徴を持つために分析対象としている。

以上の6つの建築における柱がどのような形状や配置をされているのかを分析し、その柱が何によって『シンボル性をもつ』柱であるのかに対して考察を行う。

それぞれの建築の取り上げる空間の写真とその柱に含まれる平面図、そして柱の分析として①かたち(太さ、高さ、形状、断面)と②配置について建物ごとにまとめた。(図9)分析より、柱のもつ『シンボル性』は、①柱の形状によりシンボル性をもつものと、②柱の配置によりシンボル性をもつものがあるのではないかと考え、

- ①かたちと『シンボル性』の関係性
- ②配置と『シンボル性』の関係性

という二つの見方より考察を行う。



図9 既存建築分析

①かたちと『シンボル性』の関係性

柱の太さ、高さ、断面の形状による柱のかたちからみる『シンボル性』について分析を整理する。柱の太さ、高さ、断面の形状と、シンボル性をもつか(左図)、行動変容があるかどうか(右図)。

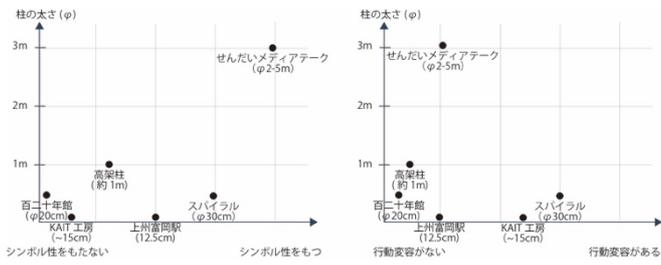


図 10 柱の太さとシンボル性、行動変容

柱の太さとシンボル性の関係を分析する。(図 10) せんだいメディアテークは一番太い柱であり、強いシンボル性をもつ。次に太い高架柱はシンボル性をあまり持たない。また、せんだいメディアテークの柱は行動変容をあまり起こさせないことや、KAIT 工房が行動変容を一番起こすことから、柱の太さはシンボル性を強く持たせる際には効果的であるが、その他の際にはあまり関係がないと言える。柱の太さと行動変容の関係もあまりないことが分かる。

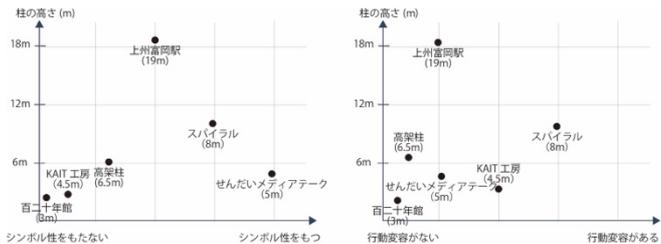


図 11 柱の高さとシンボル性、行動変容

柱の高さとシンボル性の関係を分析する。(図 11) 上州富岡駅は 19m もの長い柱であるがシンボル性を強くは感じない。上州富岡駅、スパイラル、せんだいメディアテークは広がって分布しているが、KAIT 工房、百二十年館、高架柱などはかたまっていたりするため柱の高さとシンボル性については相関関係はないと言える。

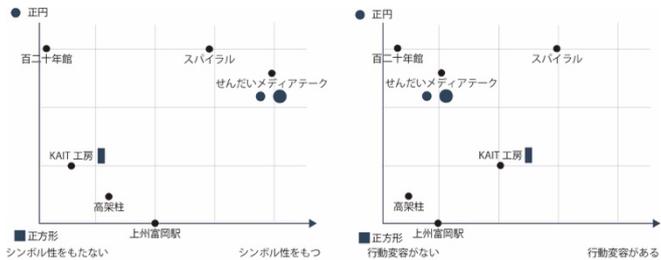


図 12 柱の断面とシンボル性、行動変容

柱の断面とシンボル性の関係を分析する。(図 12) せんだいメディアテークの柱の断面は円に近いが、切り取る箇所が変われば、その円の大きさが変化する。また、KAIT 工房の柱の断面は長方形であるが、それぞれの柱における断面寸法が変化している。柱の断面

が四角よりは円の方がシンボル性をもちやすい傾向にあることが分かる。また行動変容を引き起こしやすい KAIT 工房は長方形の断面を持つ。他の柱とは違い方向性をもつ柱であるためだと考えられる。

②配置と『シンボル性』の関係性

柱の配置からみる『シンボル性』について分析を整理する。

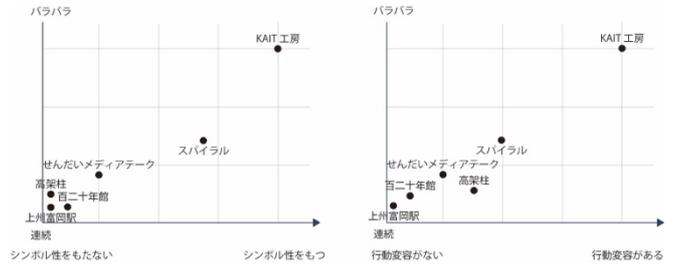


図 13 柱の配置とシンボル性、行動変容

柱の配置とシンボル性の関係を分析する。(図 13) KAIT 工房は柱がバラバラに配置されている。スパイラルは窓のそばの柱は一列の直線で並んでいるが、階段の窓側ではない方にたっている柱と窓側にたっている柱は対応するように配置されていない。せんだいメディアテークはある程度の直線に並んでいるが、どの柱もそこから少しずれたところに配置されている。左図が正の相関をとっていることから、柱がバラバラで配置されているほどシンボル性をもつといえる。同様に右図についても正の相関となっているために、柱の配置をバラバラにすることで行動変容が起きやすくなるのではないと言える。

4-3. 『シンボル性』と行動変容

シンボル性と行動変容について分析を行う。シンボル性を①かたち(太さ、高さ、断面形状)②配置と分けて分析を行ってきたが、実際の建築にある柱はその二つの見方をあわせもっている。

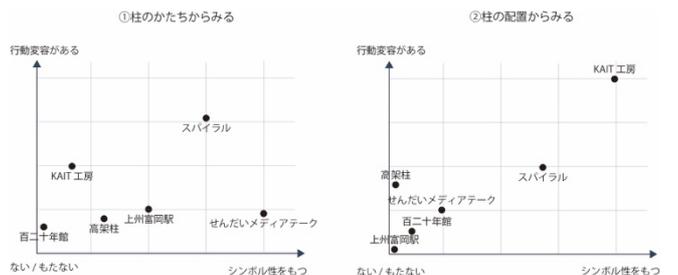


図 14 シンボル性と行動変容の関係

図 14 は左図が①柱をかたちから見た時のシンボル性と行動変容の関係性をまとめたもの、右図は②柱を配置から見た時のシンボル性と行動変容の関係性をまとめたものである。KAIT 工房に注目してみると、かたちから見た時はシンボル性を持たないのに対し、柱の配置から見た場合にとっても強いシンボル性をもつことが分かる。また、せんだいメディアテークは、かたちからみると強いシンボルをもつが配置から見た場合はそこまで強いシンボルはもっていない。

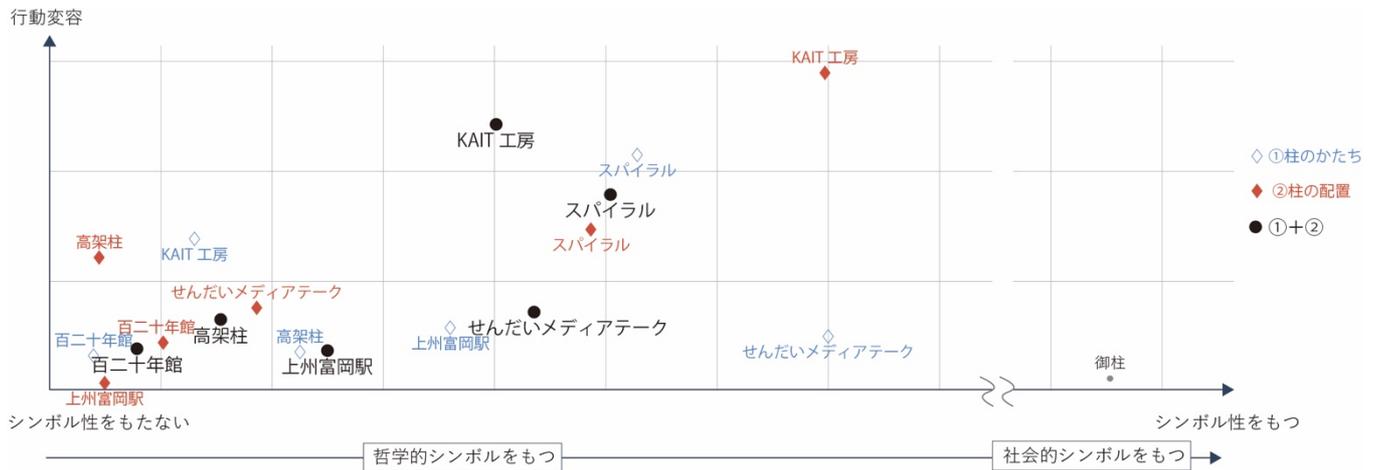


図 15 シンボル性と行動変容

①柱のかたちと②柱の配置からみるシンボル性を合わせると、図 15 のようになる。とても強い社会的シンボルをもつ柱として御柱も比較対象として図に入れる。御柱と分析対象の関係より、社会的シンボルと哲学的シンボルは延長線上にあることが分かる。

図 15 において、KAIT 工房は柱の配置、せんだいメディアテークは柱のかたちからみたシンボル性がそれぞれ強くなっていることが分かる。かたちや配置と見方を変えても変化があまりないのは百二十年館である。スパイラルは見方を変えても、シンボル性に変化があまり見られないと言える。この図を参考に、シンボル性との相互作用により行動変容が多様にかかる建築を設計する。

## 5. 設計提案

### 5-1. 対象敷地

対象敷地は新宿区西新宿にある新宿中央公園である。新宿中央公園は区立公園としての最大の面積である。緑豊かなこの公園は高層ビル群に囲まれた大都会のオアシスとして多くの人に親しまれている。昭和 43 年(1968)4 月 1 日に新宿副都心計画の一環により、先進都市・新宿を支える重要な都市基盤として開園し、平成 30 年(2008)に開園 50 周年を迎えている。



図 16 新宿中央公園

すぐそばには都庁が建ち新宿を代表する景色が広がっている。かつては浄水場であり、新宿駅の発展に伴い、浄水場の移転の要望がたために再開発がされた。2004 年以前にはホームレスや公園の不適切利用が増えていたが、路上生活者自立支援事業などを展開し平成 27 年(2015)には園内に住むホームレスはいなくなる。平成 25 年

(2013)には指定管理者制度を導入し、新宿中央公園の管理を民間委託することにする。株式会社昭和造園、日建総業株式会社の二社に加え、令和 3 年(2021)には小田急電鉄株式会社も参入している。冬にはイルミネーション、屋台の出店やシネマの上映などのイベントの開催なども積極的に行なっている。令和 2 年(2020)には「SHYUKNOVA(シュクノバ)」というジム、レストラン、カフェの入る商業施設ができた。

### 5-2. 敷地周辺と用途

周辺には高層のビル群や、東京都庁が建つ。また、新宿中央公園はオフィス街の中での、都会のオアシスでもあり、区民のワークショップの場所や散歩場所としても使われている。

また、公園の中にある新宿区立区民ギャラリーの複合施設の建て替えとし、生きられる建築と都会の人々との相互作用を期待して、都市のギャラリーを設計する。



図 17 周辺敷地

### 5-3. 定義された空間

意味の変容にははじめの定義が必要であるという分析から提案する建築には定義された空間の設定が必要である。都市の中の建築であること、公園の中の建築であることによる提案の建築に対して大枠の定義もつことができる。建築の内部においても定義された空間が必要である。

#### 5-4. 空間構成について

建築の構成について考える。意味の変容が起こる空間というのは、定義と再定義を繰り返すことであり、同じ空間、ものなどに対して経験をすることが大切である。この建築の中での体験がツリー構造

(a)では、その再定義を行うことが起きないのではないかと考えられる。そのために、空間の中での体験をセミラチス構造(b)のようにすることが大切である。また、(c)は経験を繰り返すことによって起こる意味の変容のポイントをあらわしたコンセプトモデルである。

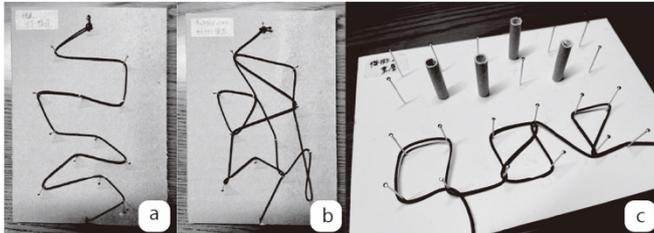


図 18 ツリー構造とセミラチス構造、意味の変容モデル

#### 5-5. 柱のスタディ

分析のから、シンボル性を持ちつつ行為の変容も生む柱の形状を検討する。柱のスタディの中で楕円の柱に対して可能性を感じる。

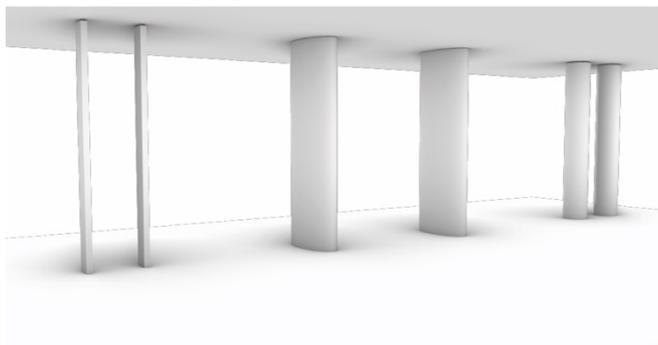


図 19 柱モデル

### 6. 結論

シンボリック相互作用論から社会における意味の生成過程には自己の相互作用、個人間の相互作用、そして社会の意味になるということや、自己の相互作用における自己の複数性があることに対しての事物に対する意味解釈の豊かさにつながる事が分かった。そして、それらを建築と人との相互作用に置き換えて考えることで、意味の変容の豊かさをもつ建築の提案となった。また、生きる人間が言動や仕草からその人の発する機微を感じ取るように、建築からも定義、再定義を行うような空間構成などにより機微を感じる<生きられる建築>となるだろう。

#### 参考文献

- 1) H・G・ブルーマー 「シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法」 勁草書房 1991
- 2) 片桐 雅隆 編 「意味と日常世界 シンボリックインタラクショニズムの社会学 世界思想社 1989
- 3) H・カッシーラー 「シンボル形式の哲学 第三巻 認識の現象学(上)」 岩波書店 1994
- 4) 鯨岡峻 「ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性」 ミネルヴァ書房 2006
- 5) 新宿区みどり土木部みどり公園課 「新宿中央公園 50周年～写真でつづる半世紀の歩み～」 2019/2
- 6) 音喜多信博 「E・カッシーラー『シンボル形式の哲学』第3巻「認識の現象学」における「シンボル」概念—その現代的意義についての予備的考察— 岩手大学人文社会科学部 2015

#### 引用文献

- 注 1) 「spiral公式HP」  
[https://www.spiral.co.jp/paper/no151\\_essay](https://www.spiral.co.jp/paper/no151_essay) 2022/1/18
- 注 2) 「東光園公式HP」  
<http://www.toukouen.com/gallery> 2022/1/18
- 注 3) 「新建築 2018年3月号」 株式会社新建築社 2018/2
- 注 4) 「新建築 2001年3月号」 株式会社新建築社 2001/2
- 注 5) 「新建築 2014年5月号」 株式会社新建築社 2014/4
- 注 6) 「新建築 2020年12月号」 株式会社新建築社 2020/11
- 注 7) 「新宿中央公園 50周年～写真でつづる半世紀の歩み～」 新宿区みどり土木部みどり公園課 2019/2
- 注 8) 「東京都庁公式HP」  
<https://www.yokoso.metro.tokyo.lg.jp/kengaku/index.html> 2022/1/18